

## 有頂天家族

第 11 期 住田 英紀

「有頂天家族」——それは、私のお気に入りの森見登美彦の小説のタイトルである。昨年、P.A.WORKS の制作でアニメ化もされたほどの人気作品である。そのアニメのオープニングの最初のフレーズとメロの最初のフレーズ、「面白くない世の中、面白くすればいいさ。」「つまらねえのが口癖なのは、それこそ本当につまらない」、私は、これらのフレーズに小野ゼミに属する前の自分の姿を見る。

小野ゼミに属する前の自分を振り返ってみる。歌唱力や音感に自信があるわけでもないのに、ただ歌が好きだという理由だけでアカペラサークルに入会し、同期が大きな舞台でライブをするのを羨ましいと思いつつも、とりわけ努力することもなく、ひたすら指をくわえて見ていた自分、理解できているわけでもないのに、なおかつ、さして外せない用があるわけでもないのに、授業を素知らぬふりをしてぶっちらがる自分。大学2年修了時までの私は、「つまらねえ」モノをどうにかできるなどと考えることもせず、そのまま受け入れてしまう人間だった。自分が「つまらねえ」のは、周りの誰か・何かのせいではなく、ただそれを黙って受け入れて終わらせている自分のせいであることに、ずっと気づけずにいたのである。

そんな私が、この小野晃典研究会に入会し、ゼミ活動に身を捧げた。ゼミ活動を大方終えた、今の自分にとっては、小野ゼミで行ったそのゼミ活動全てが、無くてはならないものであったように感じられる。例えば、ケースメソッドを経験することで、現状をそのまま受け入れるだけでなく、なぜこのような窮地に立たされているのか、なぜこの分野に進出していないのかなど、ことあるごとになぜと疑問を抱く癖を身に付けることができた。また、ケースメソッドの解題・総括、および三田論・卒論の執筆活動を経験することで、全くの無の状態から何かを創出することの難しさと面白さを学ぶことができた。

このように、他の授業や研究会では、決して得ることができない学びの場を小野晃典先生が与えてくださったお蔭で、私は大きく変わることができた。小野晃典先生には、本当に感謝の想いでいっぱいである。

そして、2年間ずっと一緒に活動してきた同期、いつも嫌な顔ひとつ見せず、親身になって相談に乗ってくださった第10期の先輩方や大学院生の方々、こんなに頼りない私なんかを頼ってくれた第12期の後輩達は、私にとって第二の家族のような存在である。皆様、本当にありがとうございました。

今後は、この小野ゼミで新しく得たスキルを活かし、「つまらねえ」を「つまらねえ」で終わらせずに、「おもしろえ」へ、常に昇華させて生きていきたい。そして、小野ゼミの子供として、恥ずかしくないよう尽力し、次に、ここに戻ってくる時は、おもしろえ人生を歩む、格好良い男になりたい。

最後に、『有頂天家族』の主人公、下鴨矢三郎の最後の台詞で締めさせていただこうと思う。「我ら一族とその仲間たちに、ほどほどの栄光あれ。」